

第1部 クラン・コー遺跡調査報告

第1章 調査の経緯と概要

第1節 調査の経緯

カンボジアにおいてはアンコール遺跡群の研究が主流を占め、ポスト・アンコール期の研究は等閑視されてきた。また人材養成の主眼がアンコール遺跡群保護であったため、諸外国による人材養成はアンコール遺跡群の保護機関であるアプサラとの共同事業であることが多かった。今回、文化庁文化遺産国際貢献事業（文化遺産国際協力拠点交流事業）の助成を受け、プノンペンの文化芸術省を相手機関として、ポスト・アンコール期王都の研究をおこなった。

今回はポスト・アンコール期の文化遺産の調査をおこなうとともに、文化芸術省所管のプノンペン王立芸術大学の学生や卒業生を主体とした人材養成も合わせておこなう。事業実施に当たってはプノンペン近くのウドンとロンヴェークの両王都遺跡をフィールドとする。なかでも近年発見されたクラン・コー遺跡は残りの良い当該期の墓葬遺跡として注目される。当該遺跡を対象として、遺跡探査、遺跡調査、展示公開の3点を中心に、調査と人材養成をおこなった。

2010年1月にプノンペンのカンボジア王国文化芸術省を訪問した折、クラン・コー村から発見されたいくつかの遺物を見る機会を得た。翌日同省官房長ウク・ソチアット氏の同道を得て、本遺跡を訪ねることができた。本村の周囲に点在する遺跡の存在を確認するとともに、そこから出土した遺物の多くを村民からのご協力で見ることができた。ただ本遺跡が盗掘による発見ということもあり、至急に遺跡の広がりや状況を把握して、遺跡保護の指針を得る必要性が議論された。

さらに今回の拠点交流事業の実施に当たっては、当初目的としたポスト・アンコール期の王都であるウドン・ロンヴェークだけでなく、遺跡の重要性・緊急性に鑑み、クラン・コー遺跡も同時に調査をおこなうこととした。



第1図 文化芸術省大臣の視察



第2図 官房長ウク・ソチアット氏との打ち合わせ



第3図 クラン・コー遺跡の遺物散布状況



第4図 クラン・コー遺跡盗掘跡

第2節 調査の概要

第1次調査

平成22年11月27日から12月4日まで第4地区と第6地区で探査と発掘調査をおこなった。

2カ所で物理探査をおこない、それぞれ良好な結果を得た。下記に探査成果の解析結果を記す。第4地区では所々に小形の反応があり、火葬墓の存在を推定できた。ただ今回の発掘調査では火葬墓は検出できなかった。第6地区では探査地点北側に緩やかに円を描く溝状の反応が得られ、この地点に第1トレンチを設定した。しかしこの反応は土中のマンガン堆積の反応であることが判明し、顕著な遺構は検出できなかった。探査地点南辺ではまとまった反応が得られ、周囲に盗掘に伴うレンガが散乱していた。この地点からは次項に述べるような火化地と想定されるレンガ遺構が検出された。

第2次調査

平成23年2月16日から21日まで、第4地区の追加調査をおこなうとともに、第8地区で新たな発掘調査をおこなった。合わせて村人が所蔵していた遺物を借りて実測調査をおこなった。

第4地区では盗掘孔のある2カ所の地点のうち1カ所を選び、盗掘孔を中心にトレンチを設定した。その結果木棺墓と思われる掘方を検出した。そのうちの1基からは墓壙のなかに木棺の痕跡を検出することができた。今回の調査によって、大形の骨蔵器が検出されない墓跡については、木棺墓である可能性が示唆された。

第8地区はこれまでの第4、6、7地区と異なり、集落の中の地点である。村人によれば今回の調査地点のすぐ北からは、クメール陶器黒褐釉四耳壺が出土し、人骨も伴っていたとのことである。今回はその近くの民家近くで調査をおこなった。全体の層位を確認し、墓葬を検出することはできなかったが、調査をすることによって、周辺の表採をおこなうことが可能になったり、周辺村人が集めた表採遺物を調査することが可能になったりと、これまでに出土した遺物群の調査をおこなうことができた。



第5図 地中レーダー探査



第6図 第6地区の発掘調査



第7図 第4地区の発掘調査



第8図 村人所蔵遺物の実測調査

第3次調査

平成23年7月27日から8月9日までクラン・コー遺跡小学校地区とロンヴェーク遺跡において調査をおこなった。各遺跡の広範囲な写真撮影のために日本治水福岡の西田氏によるマルチローターヘリを用いた空中写真撮影をおこなった。クラン・コー遺跡では第7地区と学校地区で地中レーダー探査と空撮をおこなった後、発掘調査をおこなった。学校地区では比較的遺物の出土が多くみられたとともに、墓葬1基を発掘した。ロンヴェーク遺跡でも土塁や堀の様子などを中心に空撮をおこなった。

第4次調査

平成24年2月8日から13日まで現地調査をおこない、2月22日に現地調査の成果をプノンペン文化芸術省で発表した。第3次調査において学校地区で墓葬が発見されたため、その周辺でのさらなる調査のために、第3次調査第1号墓の西側にトレンチを設定するとともに、墓葬1基を検出した。土師質土器の出土が多く見られた墓葬区の東側に長さ15mのトレンチを設定した。

第5次調査

平成24年8月12日から19日まで第5次調査をおこなった。第3次・第4次発掘調査において、1号墓、2号墓が発見されたことを受け、本次調査では更なる墓葬の有無を確認するため先回までの発掘区域に近接した位置にトレンチを4カ所設定した。今回設定した4カ所のトレンチから墓葬は確認されることはなく、土器片の厚い堆積層が確認された。土器堆積層は地表面約20cmから100cmにかけて堆積しており、出土した土器片はいずれも在地産のものであると判断された。また、土器堆積層の中から土器製作に用いる当て具が25点、陶製腕輪片が59点、石製腕輪片が4点出土した。

今回発見された土器堆積層内から、シーサッチャナライ窯産製と思われる青磁片が出土しており、15世紀中頃から後半の製品と考えられる。1号墓からも同時代のシーサッチャナライ青磁が副葬品として埋納されていたことを考えると、今回検出された土器堆積層も、墓葬とほぼ同時代と考えられる。

今回の発掘調査から、1号墓、2号墓の周辺には厚い土器堆積層が存在していることが判明した。出土輸入陶磁器の年代観から墓葬2基と土器堆積層は15世紀中頃から後半ないし、16世紀初頭に属すると推定される。



第9図 学校地区空中写真



第10図 学校地区から第4・6・7地区をのぞむ



第11図 村人への説明会



第12図 学校地区での探査風景



第13図 学校地区 第1号墓の発掘



第14図 プノンペンにおける成果報告会



第15図 学校地区 2号墓調査風景1



第16図 学校地区 2号墓調査風景2

クラン・コー遺跡、ロンヴェーク遺跡調査参加者

(所属は当時)

杉山洋 (企画調整部国際遺跡研究室)

小澤毅 (埋蔵文化財センター遺跡調査技術研究室)

金田明大 (埋蔵文化財センター)

石村智 (企画調整部国際遺跡研究室)

田代亜紀子 (企画調整部国際遺跡研究室)

佐藤由似 (企画調整部国際遺跡研究室)

西村康 (ユネスコアジア文化センター文化遺産保護協力事務所所長)

西田健典 (日本治水福岡)

Lam Sopheak (奈良文化財研究所現地事務所)

Loeung Ravvattey (奈良文化財研究所現地事務所)

Sok Keo Sovannara (奈良文化財研究所現地事務所)

Ouk Socheat (カンボジア文化芸術省)

Heng Sophady (カンボジア文化芸術省)

Heng Kimson (カンボジア文化芸術省)

Pen Phiwath (カンボジア文化芸術省)

Chea Sopheary (カンボジア文化芸術省)

Ros Sythoun (カンボジア文化芸術省)

Ouk Sokha (カンボジア文化芸術省)

Sar Sovan (カンボジア文化芸術省)

プノンペン王立芸術大学考古学部学生